

日本海南西海域における底魚群集構造と これを考慮した漁業管理モデルの可能性

日本海南西海域における底魚類の資源水準は総じて低位状態にあり、これを漁獲対象とする底びき網漁業は底魚資源の大幅な回復がない限り多額の投資を伴う代船建造を進めるのは困難な状況にある。底魚資源の早期回復を図るためには、不定期に発生する卓越年級群を有効に活用することが効率的である。しかし、現状では、卓越年級の発生が確認されるのは、それが漁獲対象になってからであり、若齢期の集中的な漁獲により再生産水準の増大に結びついていない。また、卓越年級発生魚種も含めた底魚群集の構造が明瞭でないため、これを選択的に保護し、親魚量を増大させるための有効な漁業管理方策の立案も困難である。

現在、卓越年級群を利用して資源を回復させ、持続生産量水準を増加させる手法の開発を進めることを関係機関で協議している。本シンポジウムでは、これに先立って、日本海南西海域における環境変動と底魚群集との関係を包括的に整理するとともに、漁獲統計資料の解析から類推される底魚群集の動態と、それに基づく漁業管理方策の可能性について検討を加える。

コンビーナー

村山達朗（島根県水産技術センター）

森脇晋平（島根県水産技術センター）

倉長亮二（鳥取県水産試験場）

大谷徹也（兵庫県但馬水産技術センター）

天野千絵（山口県水産研究センター）

原田泰志（三重大学大学院生物資源研究科）

木下貴裕（日本海区水産研究所）